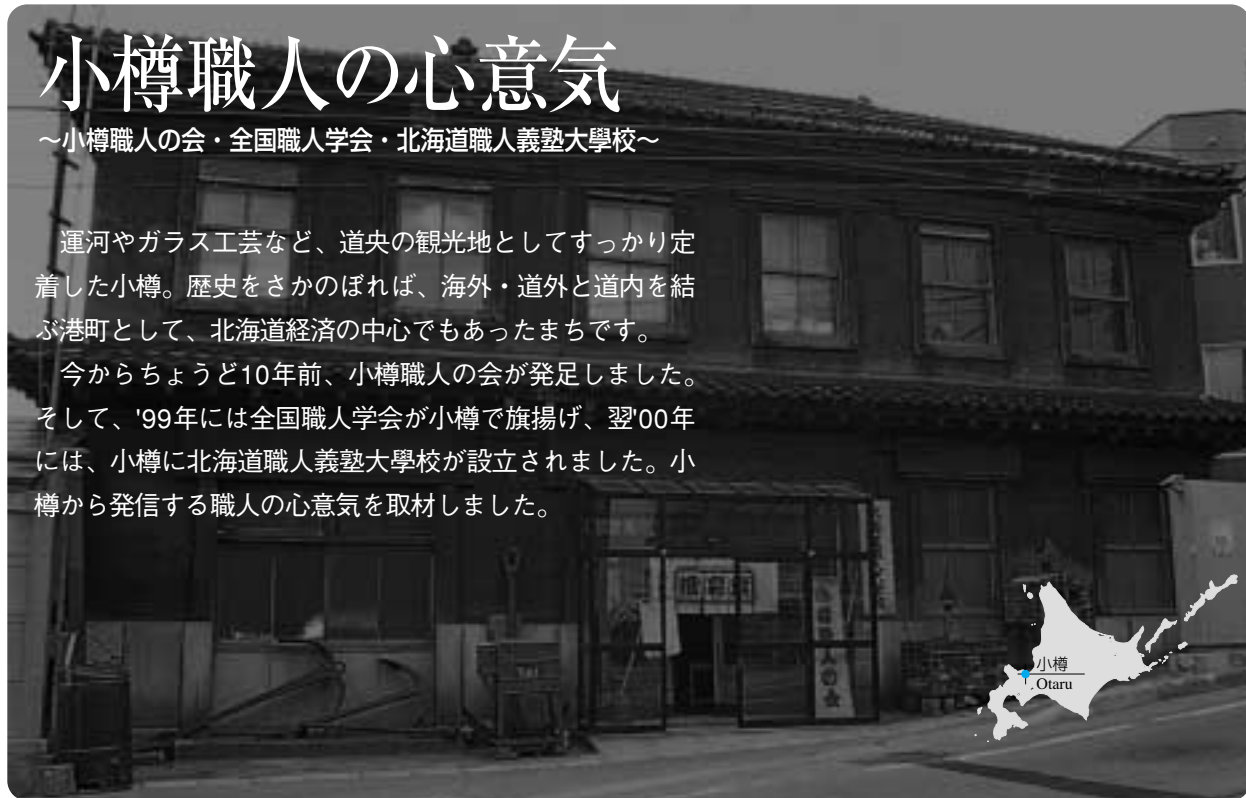


小樽職人の心意気

～小樽職人の会・全国職人学会・北海道職人義塾大～

運河やガラス工芸など、道央の観光地としてすっかり定着した小樽。歴史をさかのぼれば、海外・道外と道内を結ぶ港町として、北海道経済の中心でもあったまちです。

今からちょうど10年前、小樽職人の会が発足しました。そして、'99年には全国職人学会が小樽で旗揚げ、翌'00年には、小樽に北海道職人義塾大が設立されました。小樽から発信する職人の心意気取材しました。



小樽職人の歴史的背景

'92年、1業種1名、32名の会員でスタートした小樽職人の会は、現在、染め物、和裁、表具、竹細工、箔押、花火、鋳物など、80名を超える会員を有しています。小樽に“職人”と呼ばれる人たちが多く存在するのも、歴史的な背景があります。

日本の近代化を支えた輸出産業は主に綿花であり、その肥料として北海道のニシンカスが利用されていました。北海道からニシンカスを、本州から開拓物資を運搬したのが北前船です。北前船を支える船大工、鋳鍛冶などの技術、漁業の際に網の印に使用した浮き玉の開発など、古くから小樽には技術を大切にする気風が育まれてきました。その後、石炭運搬のために小樽～札幌間に鉄道が敷かれたことで、土木技術や建設技術も生まれてきます。開拓時代には、開拓に必要な物資が小樽港に運ばれ、そこから樺太(サハリン)や道内各地に運搬されていました。小樽には多くの輸送会社や問屋が進出・開業し、小樽商人が誕生。国際貿易港として黄金時代を迎えます。

'20年には10万人の人口に達した小樽は、北海道でも卓越した都市に成長し、日本海狭しと産業資材の流通が盛んになり、軍服、家具、時計、ゴム長靴、下駄、ラムネ、酒造など、さまざまな産業が開花したのです。

今でも「小樽は商工業全体が職人業」と、北海道職人義塾大の大川時夫校長はいいます。「従業員4～30人以内の中小企業は市内の79%、4人以下を含めると80%以上」と、少数精鋭の企業が中心です。多くの企業が一人ひとりの技術を生かしていかなければ生き残れないのです。職人といっても製造業ばかりではなく、寿司職人や菓子職人など、サービス業関連の職人も意外に多いことを考えると、小樽には本当にたくさんの職人がいることを実感します。



小樽の伝統技術を受け継いだ品々

小樽職人の会発足のきっかけ

小樽は北海道開拓の基点になった地であり、さまざまな技術の発祥の地でもあります。しかし、札幌の巨大化に伴い、北海道経済の中心地であった小樽の影は薄れていきました。その後、しばらく小樽の商工業者たちの間では模索の日々が続いていましたが、全国的知名度を得た運河論争で、小樽は観光地として道内外に知られるようになりました。

その一方で、全道的にも技術を継承する人々の高齢化が進み、小樽の商工業者は危機感を抱き始めます。「ここで何かをしなければ」と話し合いを重ねているうちに出てきた言葉が“職人”でした。当時、職人というものは、ブルーカラーで、3K（汚い、きつい、危険）だと、若い人たちに人気がなく、マイナスイメージがありました。しかし、その時「おれは職人という言葉に誇りを持っている」と、小樽の職人たち、一人ひとりが自覚したといえます。

そして、情報交換や自己の技術の研鑽、後継者育成などを目的に'92年、「小樽職人の会」が立ち上がりました。職人の技術を継承するだけでなく、職人氣質、ものづくりの精神を伝えていこうという思いもありました。「その時代、その時代に絶えず新しいものに挑戦し、地域に流行を起こしてきたのが職人です。必要のないものは減びていきます。しかし、その新しいものに挑戦する精神を伝えたいのです」

旗章指物師である伊藤さんは、大漁旗、のれん、半纏などの制作を手がける伊藤染舗の6代目



と、小樽職人の会で小走（世話役）を務める伊藤一郎さんはいます。

全国職人学会、北海道職人義塾大 schools 設立へ

これまでこうした職人同士のつながりは、あまり見られませんでした。同業種間での組織はあるものの、それはいわば縦のつながりのようなもの。異業種間による横のつながりは意外と少なかったのです。しかし、北海道開拓の基点であった小樽はさまざまな業界の発祥地でもあり、札幌ほど肥大化していない点もプラスに作用したようです。

一方で、伝統技術の保護・継承、職人精神の継承といっても、大義名分だけでは成り立たないことも事実。安くてそれなりにいいものが海外で生産されるようになり、100円ショップも台頭する昨今、仕事がなくなる不安、業種間ですみ分けをどうするのか、のれん分けをどうするのかなど、現実には多くの問題に直面します。

そこで、北海道よりも歴史のある本州ではどうなのか、あるいは海外ではどのような制度があるのか、そういったことを勉強しながら、職人の交流や職人資格制度確立を目指そうと、'99年に全国職人学会を立ち上げることになります。京都や金沢など、本州には伝統のある地域があります。また、ドイツにはマイスター制度など、伝統技術を継承する制度も整っています。そうした制度を研究するとともに、職人技術の継承を実践的に行うために、翌年には「全国職人義塾大 schools」も設立されました。

地域の異業種を統合し、伝統技術の保護・継承に当たる小樽職人の会。日本国内と世界の職人をつなぐ交流の場である全国職人学会。職人の後継者を育てる機関であるとともに、研究開発部門として新しい技術を開発していく実践の場である北海道職人義

塾大學校。これら三つの機関が重なり合いながら、小樽から職人の心意気を発信していこうとしているのです。

ものづくり文化を子どもたちに伝える

小樽職人の会では、'96年から作品展示のほか、職人技の実演・制作体験ができる「おたる職人展」を開催しています。昨年は「北海道職人展」と名称を改め、子どもたちと職人が連携してものづくりを体験し、さらに作ったものを自分たちで販売する「キッズベンチャー塾」も開催しました。小樽市内の小学校5・6年生38名が、商品を企画し、販売目標を立て、おじいさんやお父さん世代の職人にアドバイスを受けながら商品を作り、実際に販売。最終的には販売額と材料費を計算し、収支までを自分たちで管理しました。その様子はテレビや新聞でも紹介され、話題を呼びました。

今年は、札幌ドームを会場に、東北地方の職人とも連携し、「第1回北海道・東北職人展」と題して、9月6～8日に職人展を開催。キッズベンチャー塾のほか、リサイクル相談や職人研修会などが行われる予定です。

また、小樽職人の会では、小中学生を対象とした体験学習も行っています。昨年は年間を通じて4,000人を超える子どもたちがさまざまな職人の技術を体験しました。小樽市内だけでなく、ここ数年は府県から修学旅行のメニューの一つに体験学習を組み込む小中学校も見られるようになり、幅広く子どもたちにもものづくりの文化を伝えています。

今後は、ボランティアで行ってきた体験学習を観光事業として育てていくことも目標にしながら、新しい職人の活躍の場を創出しようと努力しています。

学ばせることが基本の大學校

一方、一人前の仕事ができる職人を養成しながら、既に一人立ちしている職人のさらなる技術研鑽・修行の場として機能している北海道職人義塾大學校では、この9月に初めて、染め物を学んだ塾生が巣立っていく予定です。

ここでの学習は「教えるのではなく、学ばせる」(大川校長) ことが基本だといいます。しかし、職人として身に付けるべき知識のうち、技術の知識が占める割合は5分の1で、最も大切なことは、社会経験や人付き合いなどの社会性なのだそうです。だからこそ、職人の社会に生徒を放り込み、実務は親方に任せながら、近代人としての認識を持つような教育を心がけているといいます。

入学資格は学歴・年齢は不問ですが、その一方で、現代の子どもたちからしてみると、徒弟制度的な学習スタイルなど、不安材料があることも事実。また、高校・大学・専門学校などの選択肢もあるなかで、



7年前に鏡函にある職業能力開発総合大學校へ転勤してきた大川さんだが、「伊藤さんの職人に対する情熱に感動」して、小樽に残ることに



北海道職人義塾大學校の校舎は、伊藤さんが黒壁の商館を譲り受けたもの。子どもたちの体験学習の場としても利用されている

「生涯その仕事で食べていく覚悟がなければならない」(大川校長)ので、それを見極めるための面接試験は非常にシビアだといいます。何よりも大切なのは、本人のやる気なのです。

北海道職人義塾大学校は、文部科学省管轄の学校ではなく、義塾の名の通り、小樽職人の会が提唱した建学の趣旨に賛同する一般市民会員の意思により設立された市民の学舎で、'01年に特定非営利活動法人(NPO法人)として認証を受けて活動をしています。ここから巣立った卒業生が、これまでの伝統を継承しながら、北海道の新しい技術と生活文化を生み出していくには、まだまだ時間がかかるかもしれません。しかし、これまで北海道が全国と比較して弱いとされてきた製造業、ものづくりの分野に力強く根を張ろうとしている動きであり、道民としても声援を送りたいと思います。

地域の宝を生かして

小樽職人の会の発足、職人展や体験学習の開催、全国職人学会の設立、そして北海道職人義塾大学校の開校など、小樽を拠点にさまざまな活動が展開されてきた背景には、支援する市職員たちの縁の下の力持ち的存在がありました。

「職人展も、もともとはお祭りの時に露店商と軒を並べて、職人たちが市民相談をやっていたことがきっかけです。そこに人が集まっていたことが市の経済部長(現・山田勝磨市長)たちの目にとまって、“おもしろいからやりましょう”と内部で働きかけてくれたのです。正直、個性が売り物の職人だけじゃ無理だと思っていたのですが、ここまで成長しました。今でも、厳しい資金面を市の支援でサポートいただいているのですが、面倒な申請書類作成もずいぶん力になってもらっています」と伊藤さん。市長をは

じめとする市職員たちには、こうした地道な活動こそが、まちの産業を活性化していくのだという思いがあったのでしょうか。

'99年には、15名の委員で地場産業の振興と新産業の創出を図るために、産学官連携のもと、小樽市地場産業振興会議も設立されています。

また、解体が決まっていた北洋銀行の前身である小樽無盡株式会社の本店(旧北洋銀行小樽支店)おたる無尽ビルを保存しようと、地域の有志が買い取り、小樽トラスト協議会を立ち上げ、市民で有効活用を検討する動きも見られています。

歴史、遺産、産業、行政、市民など、地域の財産をさまざまに組み合わせながら、地道な活動を続けるまち。一言では言い表せない多彩な表情を持つ小樽に息づく職人の心意気に、次代のものづくりを担うカギがあるように思います。



花園町にあるおたる無尽ビルで体験学習が開催されることもある